

「もう一度のいのち」
— 語られ、再生産されるドナーの「いのち」 —

保岡 啓子*

Rebirthable Life: Narrative and Reproductive Life of
Japanese Brain-Dead Donors

*Keiko Yasuoka, PhD.

**Graduate School of Letters, Hokkaido University

Ten years have passed, since the organ transplantation law was established in Japan in 1997. Only 52 cases of organ transplant operations from brain-dead donors have been performed (as of 2007/02/25). Also, social consensus has not yet been reached in Japan. As a result, most Japanese recipients still depend on living donors or overseas transplants.

Seven recipients and six donor families were interviewed and recorded. In addition, participant observations were performed at the some events with them at the same time. The data were analyzed using a qualitative research method and specifically utilized coding method from the grounded theory approach.

Results reveal that the existence of donors is the most important issue for concerned parties. They respect the donor's death, but they produce various interpretations about donor's lives at the same time. In spite of the limited biological life of donors, they can be re-born in both recipients' bodies and minds. Also donors can get a renewable life with unique patterns through their narratives.

Recipients thank donors but they don't know how to show their appreciation to them. They have complex feelings towards donor families but they don't know how to express them. Some donor families regret organ donations from their own children/spouses but they don't know how to control their negative feelings towards recipients. Some donor families are satisfied with organ donations from their children but they don't know how to connect with recipients. There were emotional tensions between recipients and donor families.

Recipients are living with donors and donor families are also living with donors in parallel. Concerned parties have started to speak out about their experiences through their narratives. Various narratives have occurred naturally and synchronically by recipients and

*北海道大学大学院文学研究科

donor families who are in different positionalities. Also recipients tried to listen to donor families' narratives autonomously and donor families tried to listen to recipients' narratives independently of each other.

This study illustrates a bud of mutual understanding between recipients and donor families. It also suggests a situation where donors are set in the core and recipients and donor families are positioned flexibly in a web around donors. Then they construct inter-dependent relationships intimately because recipients need donors' organs to survive and donor families need recipients' bodies to rebirth a donor. This new concept of life produces donor's life, i.e. "Rebirthable Life" as narrated by a donor mother.

キーワード

脳死・臓器移植 brain death & organ transplantation

ドナー donor

レシピエント recipient

ドナー家族 donor family

もう一度のいのち rebirthable life

I. はじめに

ああ、やっぱり良かった、良かったんだなあって、何処の何方が臓器を受けたか判らないけど、兎に角皆さん、お元気になられて、本当にもう一度のいのちですよね。誰もがができる事じゃない。めったに臓器なんてあげる事も出来ないし、貰う事も出来ないですよね、たまたま臓器があって臓器提供を受けるという、自分が求めたってあげられないし、貰えないし、本当によほどの幸運者でないと。こればかりはね。息子もね、レシピエントの方もね…

(ドナー家族Aさん 母親^{注1}:下線著者)

これはドナーの母親が息子の臓器提供の経緯についてインタビュー後、呟いた語り

注1 本稿ではアルファベットで表記し、続柄と移植臓器のみを記す。

である。息子の突然の死と医師の強要による臓器提供は親として苦渋の選択であり、苦しみと悲しみだけを残す時期が続いた。しかし、実際にレシピエントと会い、「息子が役に立っている」と実感し、「良い事したね」と仏前に報告した時の心境である。

II. 問題の背景

1. 本論文の目的

日本では1997年に臓器移植法が施行されたが、脳死からの臓器提供は52例に留まり、海外渡航／生体移植に頼らざるを得ない。そこで、本論では当事者の語りを基に、脳死・臓器移植とはどのような医療なのかを分析する。そして、当事者にどのような生命観の変化が生じているのか¹⁾²⁾。ドナーはどのような死者／生者として語られているのかを明らかにし、脳死移植を生命論の観点から再検討する³⁾。ここでは、「移植しか助からない」患者と「提供して良かった」と語るドナー家族との関係性に着目し、ボトムアップ式に考察する。そこから当事者と現場に結びついた知見が得られると考える。

2. 研究対象と研究方法

本研究ではインタビュー調査と参与観察を行った⁴⁾⁵⁾。調査の最大の障壁は対象者とのファート・コンタクトで、当事者との接触は不可能に等しかった。そこで、予備調査を入念に行うことにした(2000～2006年、計13回、北米にて調査)。まず、アメリカの大学で脳死移植の研究を行っている研究者をアルファベット順に検索し、メールで協力の依頼を試みた。スタンフォード大学の医療人類学者の協力を得て、日本からの海外渡航移植患者が同付属病院に入院しているという情報を得た。その結果、アメリカと日本国内計3つの領域でのインタビュー調査と参与観察を行うことが可能となった。

①アメリカ：スタンフォード大学付属病院

心臓移植が必要な患者は海外渡航移植しか生きる方法はないに等しく、街頭募金で資金を集め渡航するケースが多い。そこで、アメリカのスタンフォード大学付属病院の移植病棟を訪ねた。参与観察は入院患者と家族のインフォーマルなインタビューと電話での対話であるが、在米日本人ボランティアの会話も含めた。

②大阪：日本移植者協議会

アメリカの移植待機者から、レシピエントの患者会等を複数紹介してもらった。帰

国後、予め調査協力の依頼を行い日本移植者協議会主催の移植会議・移植者スポーツ大会のボランティア通訳の公募に申し込んだ。脳死／心臓死からの臓器提供を受けたレシピエントのインタビュー調査は、この会のメンバーの協力によるものである。

③東京：日本ドナー家族クラブ

日本唯一のドナー家族の会で、ドナー家族自身で立ち上げた。ここでの参与観察は、レコグニション・セレモニーの「命・きずなの日」やキルト展である。ドナー家族は臓器提供後、悲嘆にくれるなか社会の片隅に追いやられてしまいかねない。ここで知り合ったドナー家族からインタビュー調査に協力してもらうことが出来た。

調査協力を依頼した対象者は、ドナー家族^{注2}が6名で脳死／心停止後の臓器提供である。ドナーとの続柄は父親2名、母親3名、妻1名である。レシピエントは脳死／心臓死の臓器提供を受けた7名である。移植を受けた医療施設は、国内3名、アメリカ2名、オーストラリア2名であった。調査地は札幌・東京・大阪・岡山で行い、期間は2003年2月～4月である。データ収集の際、インフォーマントにメールで調査の主旨とテープ録音の依頼をした。許可が得られた場合、インタビューの日時と場所を指定して貰った。インタビュー前に再度、録音許可を確認した。会話は逐語的に文字変換した。

研究方法は質的研究法を用いた⁶⁾⁷⁾。データ分析は、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手続きに依って、新たな理論構築を試みた⁸⁾。本論では、特に萱間のコーディング方法を参考に概念が浮かび上がるまで繰り返した⁹⁾。徐々に概念の抽象レベルを上げ、データから浮かび上がってきた概念と概念の関係性を構成した。

III. 結果の分析と考察

インタビュー調査で分かったことは、当事者は予想以上に自身の体験を語りたいという要求を持っていたことであった。インタビュー時間はレシピエントが約1時間、言葉を選び選び語り、ドナー家族は1～4時間、ドナーや臓器提供の経緯を語った。レシピエントは再移植を射程に入れ、社会的コンセンサスを得るには、自身の体験談を語る必要があるという自覚を持っていた。一方、ドナー家族は、提供後に社

注2 ドナーは死亡しているので「遺族」が相応しいと思われるが、これに対してドナーの家族から批判的なコメントを受けた。本論では、ドナーの家族の臓器提供の体験を深く理解するために、彼らの心情を尊重して、「ドナー家族」という表現を採択する；「遺族ではなく家族です。息子は今も生きています」（あるドナーの母親の語り）。

会から孤立してしまい、臓器提供に伴う遺族の悲嘆を語る場を探していた。そして、彼ら自身が語らなければならないという使命感から体験談を話す場合が多かった。

1. 当事者の語り

本研究での当事者とはレシピエントとドナー家族を指す。つまり、ドナーを中心に据え、その周辺に位置する人々の生命観に着目したい。そして、当事者にとってドナーとはどのような死者／生者として語られるのかに焦点を当てる。ドナーの存在を重視し、ドナーはどのような死者／生者として語られるのかを明らかにしていきたい。

1) レシピエントの語り

レシピエントがどのような経緯で臓器移植を受けることになり、どのような葛藤を抱いて移植を受けたのかBさんは次のように語る。

毎日死ぬか生きるか、自分の身体が日々自分の身体じゃなくなる。一つ一つ物事が出来なくなる。普通に立ったり、座ったり、ご飯を箸持って食べるとかどんどん出来なくなる。腹水が溜まって32キロに落ちて、お腹だけ3キロの腹水、それで足はやせこけてく。自分の身体が支え切れなくなって、寝たきりになって、床ずれが出来るし、寝てても横に移動するのでめいっぱい精一杯。自分が自分じゃないってゆうか、当たり前事が出来なくなってく恐怖に毎日震えてて、こんなに具合悪くなって、ここまでして生きなきゃいけないのって、もの凄く自分の中で葛藤があって、辛過ぎた・・・

(レシピエントBさん 肝臓)

Bさんは、オーストラリアで移植待機者として入院していた時のことについて語った。脳死移植は「誰かの死を待つ医療」と言われるが、彼女が考えたのは自身の死だった。実際、「ドナーの死とか考える余裕がなかった」と語る。レシピエントは、移植しか助からないと医師から宣告された時、まず、頭に浮かぶのは自身の死のようである。また、待機中の患者が待っているのは、臓器そのものであり、その臓器の持ち主のドナーにまで考えは及ばないようだ。そして、運よくドナーが現れ、移植手術が成功し、回復して心に余裕が出来た頃から、ドナーの死について心的負担が生じるようだ。

2) ドナー家族の語り

一方、移植者スポーツ大会で元気なレシピエントと会った時の心境についてドナー

の父親のCさんの感想に注目してみたい。

元気な姿を見て、スポーツはもっとゆっくり、あれ程激しい動きをしたんで、ビックリした様な状態ではあったんですけども、逆に、その時に思うたのが、なぜこんなに元気なの。逆に、これはどう言うたら良いのかなあ、ちょっと分かり難いやけど、私自身でも、ちょっと、言い難いんですけども、なぜ、こんなに元気なの？もうちょっと、病人らしいならんの？という風な気持ちは正直言ってありました。正直言って、頭の中では、それは判つとるんですよ。元気になられて良かったねえいう気持ちは判んですけども。なぜ内の子がそこに居てないのっていうのが正直な気持ちですね・・・
(ドナー家族Cさん 父親)

Cさんは、「臓器だけでも生きていて欲しい」と、娘の臓器提供を承諾した。「行方不明の状態ではあるけど、娘は何処かで生きている」と、そのレシピエントに会いたがっていた。どのレシピエントに娘さんの臓器を贈られたのか、現行の移植法では知る由もない。そこで、娘さんの存在を少しでも感じることが出来る場へと遠路はるばるやって来た。しかし、実際に元気なレシピエントの姿を見た時、ドナーの父親として込み上げてきた感情に彼自身が戸惑ったようだ。当時、「内の子は元気に出来なかった」という感情で、レシピエントのことを喜べる心の余裕がなかったCさんの悲嘆の深さが伺える。

2. 相互理解への試み

1) 体験談と経験談：臓器移植の体験と臓器提供の経験

臓器移植／提供直後、ドナー家族とレシピエント間に緊張関係があった。しかし、時間の経過と共に、自然発生的・同時多発的に相互理解が芽生えてきた。それぞれの体験談と経験談を誰に指示された訳でもなく語り始めた。具体的には、①レシピエントが臓器移植の体験を語る、②ドナー家族が臓器提供の経験を語るという2点である。①は、レシピエントが語り始めた時、ドナー家族が聴衆の中に居合わせた。②では、ドナー家族が語り出した時、レシピエントも聞き手の中に参加していた。このように、ごく自然に、当事者たちが体験談と経験談の語りを通して相互理解を深めつつあるようだ。

しかし、それぞれのスピーク・アウトの聴衆の中に、逆の立場の相手がいたことは

偶然ではない。その背景には、移植医療への環境の不備を指摘することが出来る。なぜなら、移植後のレシピエントとドナー家族の関係性は分断されてしまっているのだ。あるレシピエントは、「ドナー家族は、内らのことどう思うてるんやろう」と、ドナー家族の手記等を見つけ出しては読んでいた。また、あるドナー家族は、「内の子は大事にしてもらっているだろうか」と、レシピエントの講演会があると参加するそうだ。それは、新聞などの広告を頼りにひっそりと「語り」を聞くという姿勢のものが多かった。

2) レシピエントの体験

レシピエントが臓器移植の体験談を語るには様々な意味が含まれる。①再移植のために臓器提供を呼びかける。②ドナーへ感謝を伝える手段。③ドナー家族に謝意を伝える。また、ドナー家族がレシピエントの体験談を聴きに来ている可能性もある。レシピエントは、「こんなに元気になりました」と伝える場を体験談に見出していた。

実際、レシピエントはドナーからの「頂きたいのち」と語り、返礼策を考えめぐっていた。移植法では、サンクス・レター以外に感謝を表す術はない。しかし、「サンクス・レターを見たら、ドナー家族の方、一層悲しむんじゃないかと思ひましてね」と躊躇うレシピエントもいた。しかし、レシピエントは何とかドナー家族に、「頂きたいのち」の御礼を伝えたいと願っていてもいる。ドナー家族のキルト展で、ドナーを見つけ出し、ドナー家族とレシピエントが対面するという衝撃的な場面に筆者も遭遇した。レシピエントが体験談を語る時、何処かにいるドナー家族へ語りかけているように映る。

3) ドナー家族の経験

ドナー家族が臓器提供の経験を語るには、3点の意味が込められていた。①殆どのドナー家族は前例のない臓器提供という経験をした先端医療の先駆者的アクターである。②ドナー家族は、臓器提供後にどのような問題が生じるのか予測不可能であったし、その余裕もなく最愛の人の死の経験をした。③ドナー家族は、子供あるいは夫の死別という喪失感の上に、臓器提供という新たな困難を抱えている。これらほとんど例のない悲嘆と困難に直面しても、その悲しみを誰かと分かち合うことが出来ない。ドナー家族は社会から孤立してしまい、臓器提供の実態を話す場を求めている場合が多かった。

本調査では、子供／配偶者の臓器提供の経験者にしかアプローチが出来なかった。今後の課題として、親や兄弟（姉妹）、配偶者でも妻の臓器提供の経験を持つドナー

家族の調査を検討中である。しかしながら、ドナーには事実上年齢制限があり、生体以外に親がドナーになった事例が中々見つからないという調査の限界もある。

3. スピーク・アウト

では、レシピエントとドナー家族はどのような内容をスピーク・アウトしているのか、双方の語りに基づきながら見ていこう。

世間に声を大にして訴えかける。移植者・ドナー家族・ドクターとか立場の違う人が外に出てって大きな声で語りかけていかないと進まない、理解の無さが今の状況を招いている、話さなければ分からない事ってある。これでもかってやっていかないとダメ。いつまでたっても他人事。自分達が動き出さない事には、話して語りかけていかなきゃ。体験者自身がこうですよ、ああですよって、患者がこういう経過を辿って、こういう結論になりましたっていう流れを知らない人が多いから、体験者が話さない事には進まない、理解が無いから色々な問題が出てくる。(語る事が)重要・・・ (レシピエントDさん 肝臓)

発言できる機会があれば、善い事も悪い事も知って欲しいし、言っていきたい、そういう場所が欲しい。どこかで元気にいて欲しい、「皆、元気にいるんだ、良かったなあ」っていう思いが大事。私達ももっと色んな話し合いをして、良い所は伸ばし、悪い所は改善していく様でないと推進にはならない。レシピエントと交流を持つ事、結局どちらも当事者なんです。当事者が話しをする事が出来ない環境にあるのは一番おかしな事だと思います。当事者の繋がりを持つ事によって色んな周りの制度が、改良させて良い方向づけにして頂ける事を望んでいます。事実、両方が当事者なんですから・・・ (ドナー家族Eさん 母親)

レシピエントとドナー家族が体験談を語ることの重要性を訴えている。レシピエントにとって自身の為であり、ドナーとドナー家族への感謝でもある。ドナー家族にとっては家族のためでもあり、ドナーの「いのち」の社会的承認を得ることでもあるようだ。しかし、このスピーク・アウトを通して、当事者たちが想定している聞き手に齟齬が見受けられる。レシピエントは、脳死移植の社会的コンセンサスと臓器提供の理解を得ることを世間に向かって語りかける。一方、ドナー家族の場合は当事者同

士で、ドナーの「いのち」を慈しむことの必要性をレシピエントに訴えるという意味合いが濃い。

スピーク・アウトを通して、レシピエントとドナー家族が当事者同士という意識を互いに抱きあっていることが判明した¹⁰⁾。彼らが語る当事者とは、ドナーを中心に据え、その周辺領域に生きているという意味を持つ。つまり、何がしかの関係性をドナーと持って生活している人生観である。ドナーとの関係性は個人々人によって多様性を帯び、レシピエントとドナー家族に特徴的な傾向も見られる。レシピエントにとって、ドナーとはどのような存在で、どのように語られるのか。また、ドナー家族にとってドナーとはどのような「いのち」を有するのかについて彼らの語りから明らかにしたい。

4. レシピエントが語るドナー

まず、レシピエントはどのようにドナーを語るのかについて検討したい。

1) 移植人生

「移植人生」とは、レシピエントのライフ・コースに着目した捉え方で、ある心臓移植医が名づけたものである。人には、誕生から死までのライフ・コースがあるが、どこかで、臓器移植を受けることによって、レシピエントとなる。誕生から臓器移植までの人生は、「前世」としてリセットされ、移植以降が「移植人生」と呼ばれて、「現世」に位置づけられる。つまり、ドナーの一部臓器が体内に宿って生きる人生が移植人生となる。レシピエントにドナーの臓器が移植され、自己の身体に他者の臓器が混交する身体ハイブリット化が生じる。その結果、自己と他者の線引きが曖昧化した身体観が見受けられ、移植人生に臓器移植手術は不可欠な通過儀礼となる。

2) ドナーと共に生き、ドナーとなって逝く

レシピエントの感謝の度合いに個人差があり、謝意が強いほど、どのように「いのちの贈り物」の返礼をすればいいのか苦悩する¹¹⁾。自ら臓器提供を望むレシピエントが多く、人生の終焉でドナーの追体験をして、返礼義務を果たすべきと捉えていた。また、レシピエントは、ドナーと共に移植人生を生き抜くことが感謝・責務と語る。

そして、レシピエントは人生の終焉で臓器提供を通して返礼義務を完結し、ドナーとの互酬的關係性を構築しているようだ¹²⁾。

5. ドナー家族が語るドナーの「いのち」

次に、ドナー家族はドナーの「いのち」についてどのように語っているのだろうか。ちなみに、波平は、生命は現代的で有限な生命観を指し、いのちは伝統的で無限な生命観を表しており²⁾、ここでは、生命にもいのちにも収まらないドナーの新しい生命観を「いのち」と、かぎ括弧を使って表すことにする。

1) 有限な「いのち」

身内の「脳死」を宣告された時、死の回避を考えあぐねる。脳死者の生命が有限と自覚させられ、「臓器提供という道がありますよ」という勧誘に承諾する。死の回避ではあるが、ドナーの「いのち」はレシピエントの生物学的死で終える有限な生命である。脳死者の生命が、臓器提供を通して、引き延ばされた「いのち」に過ぎない。

2) 更新可能な「いのち」

仮に、脳死状態の子供（配偶者）の臓器提供をしなければ、その家族は数日後に遺族となる。しかし、臓器提供という先端医療の介入によって、ドナーという一部臓器の生命活動の維持が可能となった。つまり、ドナーはそのままでは数日以内に心停止に至るが、臓器提供によって一部臓器だけは他者の身体で「延命」する。当然ながら、以前の自分の身体と臓器の統合は諦めざるを得ない。何処かの誰かの体内でその「いのち」の更新が可能となるのである。このように、ドナーは一部臓器だけでも更新可能な「いのち」を獲得したということになる。しかし、ドナーのこの更新可能な「いのち」も、レシピエントの死と共に消滅する有限な生命である。

また、ドナー家族は臓器提供時には、まだレシピエントのことを考える余裕は無いようだ。殆どのドナー家族は臓器提供時に、「いのちの贈り物」として臓器提供をしようと思うわけではない。しかし、様々な葛藤を潜り抜け、元気なレシピエントと対面する頃には、結果としての「いのちの贈り物」という解釈に辿りつくようである。

6. レシピエントとドナー家族

では、レシピエントとドナー家族の当事者同士は、ドナーを中心にして、一体どのような関係性を構築しつつあるのだろうか。

1) 相互依存的関係性の構築

著者が脳死移植の調査を始めた頃、レシピエントとドナー家族は、相互理解どころか互いに反目し合っているという印象を抱いた。そして、その両者の緊張関係が長らく続いていたと思われる。しかし、時間の経過とともに、レシピエントとドナー家族

の間に共鳴しあう関係性が生じつつあるようだ。

脳死移植医療にドナーが必要ならば、レシピエントにドナーの臓器が不可欠であることは言うまでもない。実際、移植しか助かる方法がないと告知されたレシピエントは、ドナーの臓器提供無しに生命活動を維持することはできない。レシピエントはドナーの臓器あるいは、ドナー家族の臓器提供の意思なしには生きてゆけないという現実がある。その一方で、ドナーも一部臓器だけでも生命活動を継続させるためのレシピエントの身体が必要な存在なのである。提供臓器から生まれたドナーの「いのち」は、臓器の受け手であるレシピエント無しには生まれぬ「いのち」なのでもある。つまり、レシピエントとドナーはお互いにお互いが不可欠な存在なのである。

ドナー無しには生きられないレシピエントとレシピエント無しには生きられないドナーの「いのち」は依存しあっている。このような相互依存的関係性をドナー家族とレシピエントはドナーを守るためにより絆を強固にする。そして、その必要性が深まるにつれ、お互いが無くてはならない存在となり、やがて一体化してゆくようだ。

では、実際に、レシピエントとドナー家族は、お互いの相互依存的な関係性についてどのように語っているのか比較考察してみたい。

2) ドナーの臓器が必要なレシピエント

移植が必要と宣告されたレシピエントは、移植待機者として、ドナーの提供臓器を待つ生活が始まる。運よく、臓器提供の恩恵に与れたレシピエントは、移植後、ドナーへの感謝と共にドナー家族に対する様々な葛藤に苛まれるようだ。しかし、ドナーの臓器とドナー家族の臓器提供の同意が無ければ、今の自身の生命はないという意識をレシピエントは深めてゆく。そして、現に生きていることについて、「ドナーあつてのいのち」と語るレシピエントを多く見受ける。さらに、ドナーの「いのち」を大切にすることが、ドナーへの責務であり、ドナー家族への感謝であるという想いを強めるようだ。そして、ドナーと従属関係を結んでゆくようである。

3) レシピエントの身体が必要なドナー

子供（配偶者）が脳死に陥ってしまった患者家族は、なんとか心停止を回避する策はないかと考えあぐねるようだ。その結果、辿り着いたのが臓器提供という身内の死を回避する一手段であるようだ。つまり、生前の生命が戻らないのなら、不完全な私たちでもいいから、完全な死を回避したい。それが、一部臓器だけでも生の痕跡が残る臓器提供ということのようだ。それには、子供（配偶者）の臓器が生きるレシピエントの身体が不可欠なものという意味合いを帯びてくる。その結果、ドナー家族は、

「内の子をお願いね」と、レシピエントに不憫な子供の「いのち」を託し始める。このような、レシピエントとドナー家族の間に委託関係が生じてくるようだ。

4) 「いのちの贈り物」：未来の死と現在の死

移植医療は第三者の提供臓器なしには成立しない医療である事も事実である。調査対象者は、「いのちの贈り物」という概念に敏感に反応した。レシピエントは臓器を切望し、その恩恵に与り、自身も誰に「いのちの贈り物」をして人生を全うしたいと語る。ドナー家族もレシピエントとの相互依存的関係を望んで提供した訳ではない。

ドナー家族の臓器提供の動機は、①ドナーの意思、②ドナーの遺志、③ドナー家族の想いに大別できる。①では、ドナーの臓器提供の意思を家族が知らない場合で、ドナーが想定した自己の死と家族が直面する身内の死に差異が生じる。②では、ドナーの「誰かの役に立ちたい」という想いを家族が知っている場合で、身内の遺志を叶えるという家族愛が見え隠れる。③は、ドナーの臓器提供の意思が不明で、「娘はまだ死にたくないだろう」と親心から臓器提供をし、後に「親のエゴではないか」と苦悩するドナー家族の場合である。ドナーの臓器提供の意思は未来の観念的な死に過ぎないが、家族が直面するのは如何ともし難い悲しみを伴う身内の現在の死である。

ドナー家族の想いは一枚岩では語れず、非常に流動的で、臓器提供の動機と現在の心情は符合する日としない日が交差するようだ。

IV. 結論：もう一度の「いのち」

本論の冒頭で引用したように、あるドナーの母親は、脳死移植は「もう一度のいのち」としみじみと語った。この言葉が印象的なだけでなく、非常に的を射た表現という感触を持つ。実際、移植医も「僕は二つの意味で「いのちの贈り物」だと思いますね。レシピエントはドナーの臓器で、健康な身体を手に入れることができますよね。ドナーも身体の一部が何処かで長く生きることが出来ますよね」と述べた。また、レシピエントも「本当に「頂きたいのち」です」と、二度目の人生という想いを強く意識している。ドナー家族も、「私（母親）の中で生きている」、「行方不明になって生きている」、「誰かに息子のいのちが引き継がれている」と語る。

そして、移植医療者、レシピエント、ドナー家族がそれぞれの異なる立場で、異なる意味内容をドナーの「いのち」に付与している。

①移植医は脳死移植医療に、二つの消えゆく生命から、もう一つの「いのち」を見出していた。つまり、生命反応が残る一部臓器に「いのち」の余韻を察知する。そし

て、その臓器を別の身体に移植することで、ドナーの完全な死を回避し、レシピエントに移植人生という再生を可能にする。

②レシピエントは、尽きていたであろう生命が、ドナーの臓器のお陰で、「頂きたいのち」を生きている。移植された臓器の贈り主と共に「ドナーあつてのいのち」を歩みつつ、ドナー家族へ感謝の日々を送る。そして、移植人生の終焉で、自ら臓器提供をし、ドナーの追体験と自身も誰かのドナーとなって逝くことで再生を試みる。

③ドナー家族は心臓死への宿命を断ち、レシピエントの体内でドナーの一部臓器をより確実な「いのち」へと育む。臓器提供は、脳死者がドナーとして他者の体内で不可視的な生者に生まれ変わる手続きとなる。そして、ドナーはレシピエントに臓器の生命を与えることで、レシピエントの身体でドナーの「いのち」を与えられる。

このように、当事者にとって脳死移植とはという問いに、「もう一度のいのち」という暫定的な結論を導くことが可能であると考ええる。この「もう一度のいのち」には、ドナーの臓器で蘇ったレシピエントもドナー家族の心の中に息吹いたドナーも含まれる。また、移植医が消え逝く生命から、消えかかった生命をつないだ移植手術も意味する。しかしながら、先端医療の刷新がめまぐるしい今日、移植医療も変化し続けるだろう。再生医療や人工臓器の臨床応用まで20年を要すると言われているが、その間、徐々に脳死移植医療も改良されてゆくだらう。医学の進歩のプロセスにおいて、「もう一度のいのち」のあり方もまた日々変化してゆくだらう。

謝 辞

本論は平成18年度北海道大学に提出した博士論文の一部に加筆修正を加えたものである。本研究の調査にご協力頂いたレシピエント・ドナー家族・移植医療者の皆様に心から御礼申し上げます。また、英文のご指導を頂いた同大学言語文化部のMark Chapman特任准教授には深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 波平恵美子：脳死・臓器移植・がん告知：死と医療の人類学，福武書店，東京，1988
- 2) 波平恵美子：いのちの文化人類学，新潮社，東京，1996
- 3) Lock M：Twice Dead: Organ Transplants and the Reinvention of Death, University of California Press, Berkeley, 2002
- 4) Spradley J：The Ethnographic Interview, Harcourt College Publishers, New York, 1979
- 5) Spradley J：Participants Observation, Wadsworth, New York, 1980
- 6) Flick U. (1999)：小田博志，山本則子，春日常，宮地尚子訳：質的研究入門：（人間の科学）のための方法論，春秋社，東京，2002
- 7) 波平恵美子，道信良子：質的研究Step by Step：すぐれた論文作成を目指して，医学書院，東京，2005
- 8) Glaser BG & Strauss A (1967)：後藤隆・大出春江・水野節夫訳：データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか，新曜社，東京，1996
- 9) 萱間真美，山本則子，太田喜久子，大川貴子：グラウンデッドセオリー法を用いた看護研究のプロセス，文光堂，東京，2002
- 10) Fox R & Swazey J (1992)：森下直貴・倉持武・窪田倭・大木俊夫訳：臓器交換社会：アメリカの現実・日本の近未来，青木書店，東京，1999
- 11) Mauss M：有地亨，伊藤昌司，山口俊夫訳：社会学と人類学，弘文堂，東京，1973
- 12) Sahlins M：山内昶訳：石器時代の経済学，法政大学出版局，東京，1984